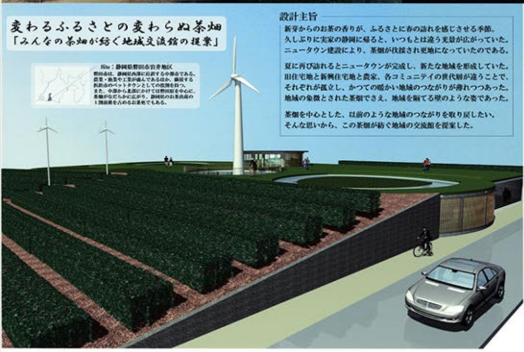


変わるふるさとの変わらぬ茶畑
「みんなの茶畑が紡ぐ地域交流館の提案」

Site：静岡県磐田市岩井地区

磐田市は、静岡県西部に位置する中部市である。農業・漁業や工業が盛んであるほか、隣接する浜松市のベッドタウンとしての役割を持つ。また、中部から北部にかけては磐田原を中心に、茶畑がなだらかに広がり、静岡県のお茶出荷の1割面積を占めるお茶処でもある。

設計主旨

新芽からのお茶の香りが、ふるさとに春の訪れを感じさせる季節。久しぶりに実家の静岡に帰ると、いつもとは違う光景が広がっていた。ニュータウン建設により、茶畑が伐採され更地になっていたのである。

夏に再び訪れるとニュータウンが完成し、新たな地域を形成していた。旧住宅地と新興住宅地と農家、各コミュニティの世代層が違うことで、それぞれが孤立し、かつての暖かい地域のつながりが薄れつつあった。地域の象徴とされた茶畑でさえ、地域を隔てる壁のような姿であった。

茶畑を中心とした、以前のような地域のつながりを取り戻したい。そんな思いから、この茶畑が紡ぐ地域の交流館を提案した。

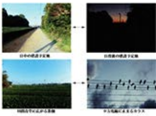
施設概要

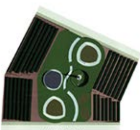
既存住宅地と新興住宅地をつなぐ茶畑の中に、小学校への通学路を覆うような形状で計画した。それぞれの空間の動線を共有すること、2つ以上の世代が交流できる空間にすることを意識し、お茶の実の一生を元にディテールを計画した。現状の地域は、冬に落ちたお茶の実のように、1つ1つが冷たく孤立している。それを収穫前の、枝につながった暖かい関係に戻そうと考えた。それぞれの空間は核という特色を持つ。それは、地域に元々あった特色であり、茶畑である。その核を崩さず、地域を固く覆っている殻という世代の壁を、動線として核へつなぐことで、それぞれの空間を密着させる。そして、土で空間を覆うことで、その関係を強固につなげる。これにより、昔ながらの茶畑に覆われた岩井地区の景観を守り、次の世代に伝える施設となる。施設構成は、カフェ空間・図書空間・小会議室・児童広場の4つで、長い通路が空間をつなぐ。自然光及び通風を積極的に空間内に取り入れるほか、風力発電を導入することでエコロジーに周辺空間と共存し、持続可能で長く地域に愛される施設とした。

建設予定地周辺図

1階平面パース兼機能図

風力発電イメージ図



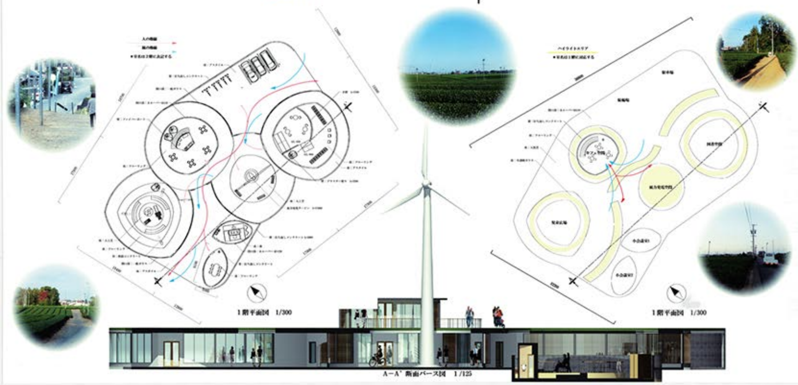


屋根伏せパース図

地覆建築イメージ図

風力発電・地覆建築の活用

風力発電を行うことで、茶畑の防霜ファン・施設内の電力を一部補い、環境への負荷を抑える。また、通学路周辺は夜間非常に暗くなるため、一部の施設内照明を付けておくことで、防犯面で地域を守る。同様に、防霜ファンの電線を地下に埋めることで、カラスによる景観の悪化を防ぐ。地覆建築ついては、南北を盛土にして、施設を土で覆うことにより地覆化した。高層ビルが乱立する現代社会において、屋上緑化する試みが積極的行われるが、地覆の場合、建物自体を自然の膜で覆うため、建築により住処を失った動植物のほか、失った景観も取り戻すことが可能である。こうした風力発電や地覆建築を活用することで、変化するふるさとに変わらぬ景色を与える。



1階平面図 1/300

1階平面図 1/300

A−A' 断面パース図 1/125